

『和漢朗詠集』 「仙家」部所収の漢詩文の一考察

早稲田大学大学院博士課程 リュウ イチメイ
劉 一鳴

日本古典文学作品の中には、神仙思想とかかわるものが各時代において数多く見られる。発表者は、これまで主として平安時代の神仙文学に注目して研究を行ってきたが、本発表では、当時の文学に大きな影響力を發揮した作品である『和漢朗詠集』の「仙家」部に収められた漢詩文について考察を行う。『和漢朗詠集』以前には、日本人の漢詩文を収める詞華集において、「仙家」部という分類がとくに設けられることはなかった。平安時代の神仙文学のあり方を把握しようとするならば、『和漢朗詠集』が「仙家」部に収めた漢詩文の検討は重要、かつ必須なものである。

『和漢朗詠集』の「仙家」部は、13首の佳句と1首の和歌から構成されている。また13首の佳句のうち、中国詩人によるものは3首、日本詩人によるものは10首である。本発表では、まず諸注釈の解釈と先行研究を踏まえたうえで、改めてこれら「仙家」部に選ばれた漢詩文の意味やそこに描かれた世界を正確に把握する。そして、紀長谷雄や菅原文時ら、当代を代表する漢文学者によって作られた「仙家」部所収の漢詩文を通して、平安期の「仙」に関わる漢詩文のあり方を探ってみる。なお『和漢朗詠集』 「仙家」部は、「道士」「隱倫」というテーマを含み構成されている。そこで『和漢朗詠集』の成立に大きな影響を与えたと思われる先行詞華集である『千載佳句』の「仙道」と「隱逸」の部に収められた中国の詩句と比較対照し、同様のテーマのもとで作成された日中の詩文の重なりとずれを観察する。さらに、その重なりとずれを生じさせた原因を文学史の中に捉え、『和漢朗詠集』 「仙家」部を構成する漢詩文世

界の特徴を明らかにし、それを平安朝漢文学における神仙文学の展開の中
に位置づけることができるか、試みを述べたい。

海外における連歌研究の動向と実作者の活動

イクタ ヨシホ
生田 慶穂

連歌は、世界的にみて大変珍しい文芸ジャンルのひとつである。その特質は次の2点に集約される。第一に複数人による共同制作を旨とすること、第二に主題の統一性を欠くことである。「寄合の文芸」あるいは「付合の文芸」として、連歌は俳諧・連句とともに、西欧の日本文学研究者・俳句作者の関心を集めてきた。本発表の目的は、海外における連歌研究の動向と実作者の活動の国際化を把握することである。連歌の英語翻訳にまつわる問題、海外における連歌の実践を報告し、さらに学際的な事例を紹介する。

連歌の英語翻訳としては、Donald Keen による『水無瀬三吟百韻』抄訳、Earl Miner による『水無瀬三吟百韻』『遺誠独吟百韻』全訳、および Steven D. Carter による『湯山三吟百韻』『小松原独吟百韻』全訳が知られる。翻訳には、二句を結びつける多義性をどう処理するか、との困難が伴う (Ramirez-Christensen, D., 1981, *The Essential Parameters of Linked Poetry*. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 41, p. 584)。寺島樵一は、連歌の多義性を広く注釈の問題として捉え直し、座で想定された多数の意味と、付句において恣意的に選択された意味とを相対化する必要性を説く (『連歌論の研究』、和泉書院、1996、pp. 183-200)。古注における鑑賞の態度、注釈書の在り方を考える上で、有益な指針である。

実作者の活動の国際化は、Darlington Richards 発行の *Journal of Renga &*

Renku が如実に示している。掲載作品は原則的に英語であるが、寄稿者の出身地および居住地は、アメリカ、イギリス、アイルランド、ドイツ、イタリア、オランダ、ルーマニア、ウクライナ、ロシア、インド、オーストラリア、ニュージーランド、日本の13ヶ国に及ぶ。“Yotsumono” という新しい形式が生み出された点も注目される。

学際的な事例には、共同制作における参加者のふるまいを考察し、人間関係やコミュニケーションのあり方を論じた研究がある (Djerassi, C., 1998, *Ethical Discourse by Science-in-Fiction. Nature*, 393 [6685], p. 511, Gabriel, Y. and Connell, N. A. D., 2010, Co-creating stories: Collaborative experiments in storytelling. *Management Learning*, 41, pp. 507-523)。文学と社会学との連携が期待される。

芳洲と『莊子』

——三教合一論へのつながりを中心に

カン ソクツク
康 盛国

醇儒と知られ、儒学の理念を第一とする雨森芳洲が『莊子』にも多大な関心を示したことは、興味深い事実である。芳洲の『莊子』への関心については、つとに指摘がされているが、それはおおむね三教合一論に関してである。つぎは、中野三敏氏の論文からの引用である（中野三敏「近世中期に於ける老莊思想の流行」『戯作研究』）。

当代三大醇儒と称された芳洲の口から、本質論に限定されたとは言え、三教合一論が出るのは、ひとえに朱子学の衰退と仏老の知識人間への浸透という事を示す以外の何ものでもなからう。老莊を認めざるを得ないという空気が感じられるのである。

中野氏は、芳洲が「三教合一」を唱えることを、当時の知識人の間にどれほど根強く老莊思想が影響しているかを示す傍証としている。『莊子』が、江戸時代中期には儒学者たちにまで強く影響しているということは周知の事実であるが、明らかに相反する要素を多数有する、儒・仏・道を「三教合一」として理解することが、何に関しても自身の合理的な思考によって物事を判断する芳洲にどのようにして可能だったのかという疑問が残る。

発表者は、芳洲の『莊子』理解が、彼の儒学的な思想にどのようにつながるかをみることで、芳洲の三教一致説の真相を究明する。具体的には、「莊子深得夫子罕言之（莊子深く夫子罕言之の意を得る）」、「莊子可謂能知孔子者矣（莊

子能く孔子を知る者と謂ふべし)」(以上、『橘窓茶話』)などの言説を取り上げ、
莊子が孔子をよく理解しているとの芳洲の認識が蘇軾の「余以為莊子蓋助孔子
者(余以為らく、莊子は蓋し孔子を助ける者なり)」(『莊子祠堂記』)との言説
に影響されていることを論証する。さらに、芳洲の釈迦への言及も視野に入れ、
芳洲の三教合一論が、三教の教理の合一性をもとにするものではなく、三教を
代表する孔子・釈迦・莊子がお互いを意識し理想とするという認識をもとにし
ていることを述べる。

〈キャラクター〉からの離脱

—細田守『おおかみこどもの雨と雪』における人物表現

オオハシ タカユキ
大橋 崇行

細田守監督による『おおかみこどもの雨と雪』は、日本国内のアニメーション関連の賞をほぼ独占したほか、海外でも高く評価され、2013年を代表するアニメーション作品だったと言える。一方でこの作品には、主人公である花が女性一人で子どもたちを育てるということに対する問題意識の欠如など、特に物語の内容面について、社会学やジェンダー研究の側から問題点が指摘されることが多かった。

本発表はこのような言説状況に対し、劇場版アニメーションだけでなく、小説版、漫画版も踏まえながら、具体的な作中人物の描かれ方に注目して分析をおこなう。このような作業を通じ、作品における表現のあり方が現代の物語文化のなかでどのように位置づけられるのかを考察するものである。

漫画、ライトノベルといったアニメーションの周縁にある現代日本の物語文化においては、特に1980年代にアニメーションの作中人物を表す〈キャラ〉という用語が定着して以降、〈キャラ〉を描くことがいわば当然のこととされてきた。たとえば漫画・アニメ的な人物を小説で描くライトノベルに〈キャラクター小説〉という位置づけが与えられてきたのは、この前提に立つての枠組みである。しかし、例えば東欧のリアリスティックなアニメーション作品群を見れば明らかなように、アニメーション作品において〈キャラ〉を描くことは必ずしも自明ではない。このような視点から『おおかみこどもの雨と雪』を見たとき、この作品は現代日本、さらにはそこから拡張する東アジア文化圏の物語文化において、従来の作品群とは異なる表現の可能性を示していたと考えら

れる。

以上のような問題意識のもと、本発表では、現代日本、さらには現代東アジア文化圏の物語文化を文学研究の立場から考えていくための、新しい方向性を探っていきたい。

ポスターセッション題目

忠こそ「孝」と「不孝」について

チヨウ シュンカイ
趙 俊槐（北京外国語大学大学院博士課程・国文学研究資料館外来研究員）

北村透谷試論

—『蓬萊曲』を中心に

チン ロ
陳 璐（東京外国語大学大学院博士課程）

探偵する形をとったマジック的なりアリズム小説

—『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論

チン コウホウ
陳 高峰（愛知文教大学大学院博士課程）

『伊勢物語』六十二段とその周辺

—朱買臣説話との比較を通して—

ハン メイショウ
潘 明昭（南京大学大学院修士課程・奈良女子大学大学院交換留学生）

続・中島敦「山月記」材源論：『論語』との関連

ライ エンコウ
頼 衍宏（銘伝大学助理教授）

『とりかへばや物語』論

—日中比較文学の視点から—

ショウ ショウジュン
庄 婕淳（立命館大学大学院博士課程）